



つながれ和泉っ子

～人と社会と未来の自分～

和泉

5月号

<https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/izu>

## 花に思いを込めて

校長 中澤 道則

自宅近くのサクラ並木。つい1か月前までは淡いピンクのサクラの花が満開でした。そのサクラ並木が、今はもう新緑に彩られています。校長室の前の藤の花もサクラの後を追うかのように満開になりました。例年なら4月下旬から5月にかけて見頃を迎える藤の花も、暖かな陽気に誘われていつもより早く満開です。そんな自然の変化、一つひとつに季節の移ろいが感じられます。



私の好きな詩画家、星野富弘さんは、そんな季節の花々を愛し、描き続けた人です。星野富弘さんは1946年、群馬県に生まれました。星野さんは中学校の体育教師でしたが、部活動の指導中に頸髄損傷の重傷を負い、首から下の自由を失ってしまいます。その後、苦しみながらも口に絵筆をくわえて文字を書く練習をし、やがて詩人&画家として活躍するようになります。

私が星野富弘さんの作品に出会ったのは今から30年ほど前、友人から星野さんの特集したテレビ番組のVTRを借りた時のことです。VTRにうつる星野さんの姿。細かいところまで描き込まれた素晴らしい「花」。そして、飾り気のない言葉で書かれているながら「ああ、本当にそうだ…」と心に染み入るような「詩」。私は書店に行って、星野さんの詩画集「四季抄 風の旅」を購入しました。特に心に残った詩は「菜の花」と「はなしょうぶ」です。「菜の花」に描かれている「強さ」と「はなしょうぶ」に描かれている「弱さ」。その当時、6年生の担任だった私はこの2つの詩を中心に据えて道徳の授業を行いました。それまでの「生命尊重」は「命は一度失うと取り戻せないもの」という部分に重きをなしたものでした。しかし、その授業で狙ったのは「生きる」ということです。生きていく上で苦しいことや、辛いことはたくさんあるでしょう。「人間」はそんな困難にくじけそうになる「弱さ」をもっているながらも、それを乗り越えていこうとする「強さ」もまた、もっている…。移ろいゆく自然の花々を見ながら、私は星野富弘さんの「花の絵と詩」を通して「生きる」ことについて子ども達と語り合った日のことを思い出していました。

今、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、私たちの生活は様々な制約の中にあります。それでも季節は移ろい、花は咲きます。先行きの見えない不安があるとは思いますが、そんな中でも前を向き、今、出来ることを一つ一つ積み重ねることで、子ども達の「笑顔」を咲かせていくため、教職員一同、努めていきたいと思えます。保護者、地域の皆様、どうぞ今月もよろしくご理解、ご協力のほど、お願いいたします。